



関西学院高等部は関学大キャンパスに隣接しており、選手たちは関学のシンボル・時計台を横目に見ながら汗を流す

関西学院 兵庫



野球の神様の粋な計らい.....

く、全選手を対等に扱った。野球経験の全くない生徒も「関学の貴重な戦力として」入部させた。現在、部員の中に帰国子女が2人いるのはその表れだ。ヘアスタイルは「伝統」の長髪をそのまま踏襲した。

そんな雰囲気イマドキの少年に受けたのか、「野球も勉強も均等に頑張りたい」という中学生の入学希望が相次いだ。入試レベルが高いために希望者すべてを受け入れることはできないが、「新チームの時点で選手が50人なんて、関学始まって以来のことです。この辺りで部員が50人を超えているのはウチと報徳学園さんくらいじゃないですか」と広岡監督はうれしそうに話す。

「自由な雰囲気」部員は全員が平等。これは、ライバル関大にも当てはまる。パンカラという伝統

から、練習中はヒリヒリしたムードが充満していると思われがちだが、実際はそうではない。

「そりゃあ、昔はスパルタでやってきましたよ」と尾崎監督(58歳)。「かつて自分がやってきたことを今の選手ができないはずがない、と思ってきました、もうそういう時代やない。7、8年前からは先生は優しくなったと言われるようになりましたわ。7、8年前といえば、関西学院に広岡監督が就任した時期と符号する。知らず知らずのうちに、影響を受けていたのかもしれない。」

また、勉強と野球の両立を目指すという点でも、関西学院と共通している。「関大への進学を目指しながら野球をしたい」という選手が、近畿一円から集まってくるのだ。ちなみに、昨年の3年生は18人全員が関大へ進学。昨秋、球速



西宮市の関西学院高等部の校舎